

# 一つの伝記論 (1)

安 達 肆 郎

## 序

小論は、私がこれまでいろいろの機会に発表してきた「伝記」についての論考をとりまとめ、その内容を再考し、整理し、且つその結果を踏まえて、新たに「伝記に関する三つの基本的問い」に答えることを目的とする。

「画竜点睛」というが、ただ準備（「本来の伝記」の諸要素に関する研究）をするだけで、肝心の「基本的問い」に答えないのでは、「点睛」を欠いた絵にひとしい。小論は、私が描いたへぼ絵（伝記研究）にいのちを——たとえ天へ昇るほどのいのちでなくとも——それなりのいのちを吹きこむことを希ってする「点睛」の作業である。

## —

「序」に述べた「点睛」の作業に入るに先立って、先ず 1. 私の伝記研究の生れ（素性）と生い立ち、2. 私の伝記研究をとりまく環境を顧みよう。

(1)は、「伝記の研究」が、私にとって、どのような意義をもつものであったかを、また、私の伝記研究の目的や構想の大体を予め示す為である。(2)は、他種の伝記研究に対する私の伝記研究の特殊性（立場、対象、方法の特殊性）を予め示す為である。

## 1

「伝記の研究」に単なる物好き以上の如何なる意義があるのか、と問われるかも知れない。

一口に「伝記」の研究といっても、伝記研究は様々の立場、様々の目的でなされるから、それがもつ意義も一様ではない。だから上の問いに一般的に答えるのは難しい。(第5節参照) それに、ここでは私の伝記論（研究）が問題な

のだから、私にとって「伝記の研究」がどのような意義をもっていたかを示せば足りる。(私の伝記研究の学術的意義<メリット>については、註(2)参照)

さて、「私にとって」の意義を示す為の最もよい方途は、私が伝記研究に取り組む様になった経緯を、即ち、私の伝記研究の生い立ち(素性)を示すことであろう。(私の伝記研究の素性を示すことは、ひいて、私の伝記研究の立場、目的、構想の大体を示すことにもなる。)以下、この「経緯」の大筋を顧みることにする。

始めて伝記研究に手を着けた頃、私は哲学的人間学(人間研究)に強い関心をもっていた。同じ頃、私は『単なる理性の限界内の宗教』の研究を中心として、「カントの宗教論」の研究に取り組んでいたが、<sup>(1)</sup>省みればそれも、人間学への関心が下地にあったからである。

さて、カントの『単なる理性の限界内の宗教』は、哲学的人間研究の方途に関して、私に一つの大きな示唆を与えてくれた。即ち、私はそこから、人間を根源的に捉える為の有力な手掛りの一つが、人間関係の実態のうちに含まれていること、その正体を解明することが、人間を根源的に捉え(理解す)る為の有効な方途であることを教えられた。(周知の様に、カントは『単なる理性の限界内の宗教』において、「倫理的自然状態」という人間関係を手掛りとし、その正体を解明することを通じて、人間の「根源悪<das radikale Böse>」<sup>(2)</sup>を明らかにしている。)

さて、人間を具体的全体的根源的に捉える手掛りとなる人間関係は、それ自体が具体的全体的根源的な人間関係でなければならぬことはいうまでもない。ところが、カントが手掛りとした人間関係、いわゆる「倫理的自然状態」は、抽象的一面的で具体的全体的根源の人間関係とは思われぬ。<sup>(3)</sup>具体的全体的根源の人間関係は、それとは異なったもので、異なった様相を示すのではないか—。然しでは、実際に具体的全体的根源の人間関係を体現している人間のいとなみは何か—。それはどのような姿で現われるか。

こうして、具体的全体的根源の人間関係を体現した人間社会の何等かのいと

なみ(事実、事象、文化、慣習等)を見出し、その正体を解明することが私の当面の課題となった。

2

丁度その頃、私はロマン・ロラン (Romain Rolland) の三部作『卓越せる人々の生涯 (Vie des hommes illustres)』を読んで深い感銘を受けた。

ロランがこの三部作、なかんづく『ベートーヴェンの生涯 (Vie de Beethoven)』で示しているのは、主人公ベートーヴェンに対する彼の全人をあげての深い傾倒の思い、一ロラン自身の言葉でいえば、主人公の「人生と人間とに対する人間的信仰<sup>(4)</sup>」である。「人間に対する人間的信仰」という呼び方には批判があるが、ロランがここでそう呼ぶのは、主人公ベートーヴェンそのひとに対する自分の全人をあげての全人に対する傾倒を意味する。

われわれは、『ベートーヴェンの生涯』のうちにベートーヴェンに対する彼の「傾倒」以外の何ものをも感じとることはできない。恐らくロランは、ベートーヴェンへの傾倒の体験(出逢い)を原動力とし、ベートーヴェンの生涯の生き方を述べる(辿る)ことによって「傾倒」の思いを自分自身に改めて確認し、且つ人々(読者)にもそれを伝える(共感させる)為に、ただただその為にこの『ベートーヴェンの生涯』を書いたのである。ロランには、その他にこの伝記を書いた目的も狙いもない。さればこそ、ロランは『ベートーヴェンの生涯』を、ただベートーヴェンに対する「愛と信仰<sup>(5)</sup>の証し」と呼ぶのである。

上の様に解してよければ(後述参照)、『ベートーヴェンの生涯』という伝記(を書くこと)は、筆者ロランの主人公ベートーヴェンそのひとに対する全人をあげての全人に対する傾倒を体現しているといつてよい。(後述参照)

そればかりではない。『ベートーヴェンの生涯』は、発刊者ペギーや筆者ロラン自身の証言によれば<sup>(6)</sup>、発刊の当時、フランスを始めとする西欧諸国の若い読者に深い感銘を与え、彼等が混乱した時世を生きる一つの支えになったという<sup>(7)</sup>。彼等は『ベートーヴェンの生涯』を読むことによって、そこに込められた筆者ロランのベートーヴェンに対する深い傾倒の思いを全人をあげて共感し、自らもベートーヴェンに傾倒するに至ったのである。そして、その傾倒の思い

が彼等を支えたのである。

この様な当時の読者にとっては、『ベートーヴェンの生涯』(を読むこと)は、即ち主人公ベートーヴェンへの傾倒の思いを共感し、主人公に傾倒することであってそれ以外の何ごとでもなかった。してみると、この様な読者の場合、『ベートーヴェンの生涯』という伝記(を読むこと)は、読者の主人公そのひとへの傾倒の体现である。

上に一応、「伝記」を書くことと読むこととを区別したが、両者は「伝記」が成立する為の必須条件である。それ故、われわれは上述を簡単に、『ベートーヴェンの生涯』という「伝記」は、筆者と主人公との、また読者と主人公との、そして筆者と読者との間の「傾倒」及びそれへの「共感」という人間関係を体现しているといつてよいであらう。

しかも、ここに体现されているひとのひとに対する全人をあげての「傾倒」は、相手のひとを自己の存在のうちに担うことであつて(後述参照)、「具体的全体的根源の人間関係」といつてよい。

してみると、私が「人間研究」の手掛りとして探していた「具体的全体的根源の人間関係」を体现した人間のいとなみ(文化)の一つは「伝記」である、といつてよいのではないか。

然し、単純にそつち切れるかどうか。少なくとも、『ベートーヴェンの生涯』を直ちに人間研究の手掛りとして利用する勇氣は当時の私にはなかつた。それまでに、なお確かめねばならぬことがいくつかあつた。

1. 上述した『ベートーヴェンの生涯』における三様の人間関係の実態やその性格は、後の分析的研究の結果を先取りしたもので、当時、それはまだ私の一つの予感にすぎなかつた。この「予感」に狂いがなかつたか否かを、検討し確かめねばならぬ。

2. ロランの『ベートーヴェンの生涯』の様な伝記は、実際には極めて稀にしか出現しない。だから、そこに体现されている三様の「人間関係」も実は例外的なのかも知れない。もし、例外的な人間関係であつたら、それを、人間(一

般)の研究の積極的な手掛りとすることはできない。だから、できることなら、『ベートーヴェンの生涯』の様な伝記は稀にしか出現しなくても、そこに体现されていた「傾倒」は、人の心情としては、特定の人の特定の場合だけに限られた例外ではなく、少なくとも素地としては、人間誰しもが何時でももつところであること、従って「傾倒」は、可能性としては、ひととひとの間に成立する通例の人間関係の一つであることを確かめねばならぬ。<sup>(8)</sup>

3. 『ベートーヴェンの生涯』に体现された「人間関係」自体は例外ではないとしても、『ベートーヴェンの生涯』の様な伝記は、伝記としては、稀にしかみられぬ例外なのかも知れぬ。もしそうだとすれば、人のいとなみの中で一般に「伝記」が「具体的全体的根源の人間関係」を体现しているとはいえないのではないか。

この疑いをはらすには、a. 『ベートーヴェンの生涯』の様な伝記は、実際には稀にしかみられぬが、例外ではなく本来の伝記の一例であること、これに対して他の普通にみられる多くの伝記は、種々の原因によって「本来の伝記」が変貌したものであることが各々事例について、確かめられねばならぬ。<sup>(9)</sup>

これら(以上三種)の確認の仕事は、もはや片手間のできるものではなかった。それに、これらの「確認」をするには、確認すべきことがらの性質上、それまでとは別種分野の別種の研究が必要と思われた。結局、私は新たに「伝記の研究」を正面の課題として、本腰をいれてそれに取り組まねばならなくなった。大阪府立大学を定年退職する前年、「伝記論の試み」(一)(二)を発表したが、丁度、伝記の研究へのその転機であった。

こうして私は人間学(哲学的人間学)への関心と研究から出発して、思いがけず「伝記の研究」へ移り、そこに留まり、その問題に深入りしてしまったのである。研究対象からいうと、哲学プロパーの分野(領域)から伝記論の分野(領域)へ渡ったのである。(そのことの結果として、そこに成立した私の「伝記研究」は、哲学と伝記論との間に、両者をつなげる一つの掛橋を渡したことになるか。<sup>(10)</sup>

さて、こうして「伝記の研究」を始めてみると、そこにはまたそこでいろいろの問題があることに気付かねばならなかった。

今日よく「伝記は文学の一ジャンルである」とか、「伝記は歴史の一分枝である」とかいわれ<sup>(11)</sup>、また、「伝記」はしばしば「教訓の書」とも、はては「思ひ出」の類とも同一視される場合がある。「伝記」がこの様にいわれたり、この様なものと同一視されたりするのは、それに相応した内容、性格の様々の伝記が実際に世に行われているからに違いない。

さて、注意すべきは、実際に世に行われているこれら様々の伝記の中には、筆者の特定の目的（例えば、ある一族の教訓に資するという目的）の手段として利用する為に書かれた伝記（「利用された伝記」）が多数混じっていることである。この様な伝記は、主人公は同じ人であっても、上の「特定の目的」が異なるに依じて、様々に姿を変える。してみると、「利用された伝記」は何れにせよともとの伝記ではなくて、筆者の「目的」によって変貌した伝記といわねばならぬ。

それで、この様な伝記が混じっていることを考えると、今日世に行われている様々の伝記が、どれもみな本来の伝記であるとは思われぬ。

では、これらの中のどれが本来の伝記なのか<sup>(12)(13)</sup>。これが、第一の問題である。

この問題は、従来、屢々行われた様に、これを独断的に断定してはならない<sup>(14)</sup>。また、ただ概念上の規準によって断定してもなるまい。問題は、人間が創り出した一つの文化、しかも、前述の様に人間を根源的に理解する為の手掛りとなるか、と期待される重要な文化（伝記）の本来の性格に関わるからである。では、如何にすべきか。

私は、先の問いに答えるには、次の様な方法によって探求をつづける他はないと考える。即ち、世に行われている様々の伝記の実例に当って、先ず、(1) 筆者がそれを書く原動力となったとみえるものに着目し、その性格を見極める為に（「原動力となったもの」の性格によって、その伝記の性格が決まる）、それを分析して、そこに伝記の「主人公に対する伝記者独得の関心」（後述）といえる様な関心が含まれていないかどうかを検討し、(2) その結果によ

て、改めて上の伝記が「本来の伝記」といえるか否かを確認し、(3) そういえる様な伝記の実例がみつかるまで、上と同じ方法で探求をつづける。(後述第三章以下参照)<sup>(13)</sup>

私は、上の「検討」「確認」を、後述する様な理由で実際には、次の様な手続きによって行った。

a. 世に行われている様々の伝記を、外見上、形式上(実質的にはともかくも)筆者がそれを書く原動力となったと見えるものに注目して、そのものの大体の性格の違い(それが筆者の目的であるか、好みであるか、狙いであるかの違い—後述参照)によって分類し、b. 分類された各群の伝記の典型的実例について、形式上外見上は一応それを書く原動力となったと見えるものを分析して、果してそこに、「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心が、実際には含まれていないかどうかを検討する。上の「検討」の結果によって、その類の伝記が「本来の伝記」といえるか否かを確認する。

(「検討」を実際にはこの様な手続きで行ったのは、次の理由による。先ず 1. 伝記を、外見上形式上原動力となったと見えるものの一応の性格によって分類しながら、なお、この様に、「原動力となったもの」のうちに、「伝記者独得の関心」が含まれていないかどうかを検討したのは、外見上形式上は、原動力となったと見えるものの中にも、実際には、それとかわりのない主人公に対する「伝記者独得の関心」が混入しているかも知れず、従ってその伝記は、たとえ、「本来の伝記」とはいえなくとも、「本来の伝記」にちかい伝記といえるかも知れない、と考えたからである。2. この「検討」を、先ず伝記を分類して、各類の伝記の典型的実例の検討から始めたのは、この検討によって、もし、その類の伝記一般の特質が、前述した「混入」<「伝記者独得の関心」が、「原動力となったもの」の内へ混入すること>を許さないことが明らかになれば、少なくともその類の他の伝記については、個々に上の「混入」の有無を検討する要はなくなる、と考えたからである。

実際には、分類したどの類の場合も、「典型的実例」の検討だけで十分で、改めて個々の伝記の検討に入る要はなかった。<後述参照>

なお、上述した「検討」「確認」の<sup>・</sup>手<sup>・</sup>続<sup>・</sup>きは、これを裏返せば、「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心の事例を求めて、それを各種の伝記の実例の中から見つけ出す為の手続きである。

「本来の伝記であること」と、「原動力の内に、主人公に対する伝記者独得の関心を含むこと」とは表裏の関係にあるから、前述した「検討」「確認」の<sup>・</sup>手<sup>・</sup>続<sup>・</sup>きは、これを上述した表裏どちらの実例を確認する為の手続きと解されてもよいが、後続する問題<次節参照>との関連からいうと、後の様に<主人公に対する伝記者独得の関心>の実例を見つけ出す為の手続きと>解するのが便利である。後述する第三章以下の私の探求も、主として<sup>・</sup>後<sup>・</sup>の<sup>・</sup>観<sup>・</sup>点<sup>・</sup>から<sup>・</sup>な<sup>・</sup>さ<sup>・</sup>れ<sup>・</sup>て<sup>・</sup>い<sup>・</sup>る<sup>・</sup>。

こうして、「本来の伝記」乃至は、それにちかい伝記の実例が見つけ出された(即ち「本来の伝記」の<sup>・</sup>存<sup>・</sup>在<sup>・</sup>が<sup>・</sup>確<sup>・</sup>認<sup>・</sup>さ<sup>・</sup>れ<sup>・</sup>た<sup>・</sup>)としても、それで、「本来の伝記」に関する問題がすっかり片づいたわけではない。

a. 前述の様に、「本来の伝記」が筆者の恣意的な目的や狙いや個人的な好み等によって、それを原動力として書かれたのでないとすれば(第三章以下参照)、「本来の伝記」は、一体筆者のどの様なところから生れたのか。「本来の伝記」を生み出した「伝記者独得のところ」は、如何なるところ(如何なる内容、性格のところ)なのか、が明らかにされねばならず、更には、b. 「伝記者独得のところ」から、「本来の伝記」は、<sup>・</sup>ど<sup>・</sup>の<sup>・</sup>よ<sup>・</sup>う<sup>・</sup>に<sup>・</sup>し<sup>・</sup>て<sup>・</sup>生<sup>・</sup>ま<sup>・</sup>れ<sup>・</sup>た<sup>・</sup>の<sup>・</sup>か<sup>・</sup>を<sup>・</sup>も<sup>・</sup>明<sup>・</sup>ら<sup>・</sup>か<sup>・</sup>に<sup>・</sup>せ<sup>・</sup>ね<sup>・</sup>ば<sup>・</sup>なら<sup>・</sup>ぬ<sup>・</sup>。

(二つの問い<a、b>は、畢竟、「伝記は本来人間精神から如何にして<sup>・</sup>ど<sup>・</sup>の<sup>・</sup>様<sup>・</sup>な<sup>・</sup>こ<sup>・</sup>ろ<sup>・</sup>か<sup>・</sup>ら<sup>・</sup>、<sup>・</sup>ど<sup>・</sup>の<sup>・</sup>様<sup>・</sup>に<sup>・</sup>し<sup>・</sup>て<sup>・</sup>>生れたか」を即ち、「本来の伝記」の<sup>・</sup>生<sup>・</sup>れ<sup>・</sup><素性>を問うものであって、先の問い<「本来の伝記」の<sup>・</sup>存<sup>・</sup>在<sup>・</sup>の<sup>・</sup>確<sup>・</sup>認>と共に、「本来の伝記」に関する<sup>・</sup>第<sup>・</sup>一<sup>・</sup>種<sup>・</sup>の<sup>・</sup>問<sup>・</sup>い<理論的関心からの問い>に属する。)

4

私が「本来の伝記」にこだわったのは然し、<sup>・</sup>単<sup>・</sup>に<sup>・</sup>、<sup>・</sup>上<sup>・</sup>述<sup>・</sup>の<sup>・</sup>様<sup>・</sup>な<sup>・</sup>理<sup>・</sup>論<sup>・</sup>的<sup>・</sup>関<sup>・</sup>心<sup>・</sup>か<sup>・</sup>ら<sup>・</sup>だ<sup>・</sup>け<sup>・</sup>で<sup>・</sup>は<sup>・</sup>な<sup>・</sup>い<sup>・</sup>。伝記は、それがギリシアで始めて<sup>・</sup>生<sup>・</sup>ま<sup>・</sup>れ<sup>・</sup>出<sup>・</sup>た<sup>・</sup>時<sup>・</sup>や<sup>・</sup>、人々の生



活が行き悩む非常の時には、人々（読者）の生活（生き方）と深いかわりを持ち、人間社会において重い存在理由をもっていたこと、それほどではなくても、伝記が人々の生活とかわりをもつ場合が多いことなどを思い合わせて、この様に、人々（読者）の生活と深いかわりをもつのが、（今日でこそ、そういう場合は稀だが）伝記の本来の姿ではないか、と思ったからである。

これは、私の妄想ではない。

伝記ブームなどといわれることがあるが、伝記に対する人々の関心は、一時的な盛り上がりなどではない。伝記は種々に変貌しつつも、とにかく人間の歴史において古来今日まで永く生き続けて来た。いいかえれば、人々は、どの様な時代にもどの様な社会でも伝記に関心をもっていたのである。この事実、伝記が本来人間の生活と直接、間接深いかわりをもつことの証である。伝記が本来人間の生活（生き方）と深いかわりをもつもので、実際に世に行われている変貌した多くの伝記も、多少ともその「本来の姿」を宿しているものでなかつたら、どうして人々がいつも伝記に関心し、伝記がその様に人間の歴史の中で永く広く生きつづけることができようか。

実際に、ギリシアの昔、他の「文学」「歴史」等の叙述から始めて独立した頃の伝記や、<sup>(16)</sup>「本来の伝記」の一つの実例と思われる近世のある伝記は（後述）、当時の人々（読者）の生き方を支える底の力をもっていたのである。（後述第八章参照<sup>(17)</sup>）

では、伝記は本来どうしてその様に人間（読者）の生き方と深いかわりをもつのか。これが第二種の問題である。

この問題は、前述した「第一種の問題」と関連する。というのは、a. 本来の伝記と人間（読者）の生き方とのかかわりは、後述する様に、畢竟、主人公そのひとと読者のところとのかかわりであるが、両者の仲立ちをするのは、この伝記を書いた筆者のところである。しかも、b. その「仲立ち」の役目を十分に果しうるのは、筆者の「伝記者独得のところ」（それが如何なるところであるかが「第一種の問題」の一つであった—前述）であるからである。（後述参照）（後述の様に、「主人公に対する伝記者独得のところ」は、特定の目的、狙い

等を含まないから、それだけ直接に「目的」等を介さずに一旦つ全人的に読者のところと響き合うことができるのである。) )

二種類の問題のこの様な関係からすると、ここにあげた「第二種の問題」は、「第一種の問題」が解明された後に、その結果を踏まえて始めて解明される問題である。

こうして、私の伝記研究の問題は、自ら基本的には次の三つに絞られてきた。

一. 伝記は本来人間精神から如何にして(どの様なところから、どの様にして)生れたか。(「伝記」独得の素性)

二. 伝記は本来人間(読者)に対して如何なる意味(生き方とのかかわり)を、また、どうしてその様な意味をもつのか。(「伝記」独得の存在理由とその根拠)

三. 畢竟、人間にとって「伝記」は本来何なのか。(「伝記」の正体)

そして、これら三つの問題を究明する為の前提条件が、「本来の伝記」の実例を見つけ出すこと、(「第一種の問題」の第一)である。

(後になって気付いたことであるが一、上述した三つの問題の立て方は、先述した私の伝記論の生い立ち<具体的根源的・全体的な人間関係への関心>を反映している。というのは、第一の問題は、結局、筆者と主人公そのひととの人間関係を、第二の問題は、読者と主人公そのひととの、また、筆者と読者との人間関係を問うものであるからである。)

5

以上、私の伝記論の生れ(素性)と生い立ちを示したので、次に、私の伝記論のいわば環境を示さねばならぬ。

上述の様な問題を追究する私の伝記研究は、今日の伝記論全体の中で、どういう位置を占めるのか一。

伝記研究は従来、様々の立場で様々の観点から行われているが、研究対象(研究領域)からみると、これを次の四種に大別することができる。

a. 国別の伝記の歴史、現状の研究。<sup>(18)</sup>

b. 文学的、または、歴史(学)的観点からする個々の伝記の研究一。<sup>(19)</sup>

c. 伝記の諸様相、性格及び伝記作成法に関する研究。<sup>(20)</sup>

d. 伝記の“Nature”についての研究。<sup>(21)</sup>

数の上で最も多いのは(b)で、(c)(a)がそれについて多い。最も少ない、というより稀なのは(d)である。

私の伝記研究は、この中のどの分野に属するか一。強いていえば(d)であろうが、厳密にいうと、私の伝記研究は伝記の“Nature” (天性、通有性)<sup>(22)</sup>の研究ではなくて、「本来の伝記」に関する研究である。

「本来」は、辞書によると、「もともと、初めから、もともとのあり方」を意味し、<sup>(23)</sup>従って「本来の性質」という場合には、それは「固有性(他から与えられたのではなく、もともとからある性質)」と、従ってまた、<sup>(24)(25)</sup>独得(特有)の性質とも同義になる。

それで、ここに私が「本来の伝記」という場合、それは、固有(特有、独得)の個性をもったもともとの伝記というほどの意味である。また、私が私の伝記研究を「本来の伝記に関する研究」というのは、それが、一種々の原因によって変貌して独得の個性を失ってきた伝記に対して、一独得の個性を保ったもともとの伝記(また、それにちかい伝記)の実例を探し出し(存在の確認)、その実例を手掛りに、伝記の本来の生れ(素性)、本来の存在理由等々を解明しようとするからである。

伝記の“Nature”の研究と、私の「本来の伝記に関する研究」との違いは、両者の方法を対比すればより明らかになると思われるので、ここで、一後述を先取りして一、私が採った方法の大筋(要点)を示そう。

伝記の“Nature”(天性、通有性)の研究なら、世に行われている各種の伝記を比較考量して、それらが均しく伝記として共有する内容、性格(通有性)を抽出する、という方法が採られるであろう。

私は、その様な方法を採らなかった。

1. 私は先ず、世に行われている各種の伝記の典型的実例を分析して、そこに伝記の「主人公に対する伝記者独得の(固有の<eigentlich>)関心」といえる様な関心が含まれているか否かを検討した。もし、その様な関心が一、し

かも、筆者がその伝記を書く原動力となったものの内に、その核心として含まれておれば、その伝記こそ「本来の伝記」の実例に違いないからである。

2. 然し、私が最初に分析し、検討した各種の伝記の実例は、そういう「伝記者独得の関心」といえる様な関心を、少なくとも「原動力」の内には含んでいなかった。というのは、私が分析した実例の場合、筆者は、伝記を書く際に、予め特定の目的や狙い、好み等をもって、それを強く意識する為に、たとえ彼がそれ以外の他種の関心をもっている、その「関心」は「原動力」のうちへ入り込むことはできず、結果的に「他種の関心」は、排除もしくは隠蔽されるからである。(小論第三章以下参照)

3. 上の様な最初の「分析」「検討」の経過及び結果に鑑みて、私は次に「伝記者独得の関心」のありか(在処)について次の様な予測をして、その線に沿って探究をすすめた。a. もし、伝記を書く際に、筆者が各種の伝記の筆者と異なり一、伝記を書くこと以外の「目的」、「狙い」、「好み」等をもたずに、即ち、ただ、伝記を書くことのみを目的とし、ただそのことだけを狙い、そのことだけを希っていたとしたらどうか。即ち、もし「自己目的」に書かれた伝記があったらどうか。その場合の筆者の主人公に対する関心は、これを「伝記者独得の関心」といえるのではないか。というのは、その際、筆者は、伝記を書くこと以外の目的、狙い、好み等をもたぬから、彼は正に伝記者であって、それ以外の何者でもないからである。b. そこでもし、ある伝記が実際に自己目的的に書かれたことが確認されたら、そのうちにこそ主人公に対する「伝記者独得の関心」の現われを見出し得ようし、その「自己目的の伝記」こそ、探していた「本来の伝記」であるに違いない。c. この様にして「本来の伝記」の実例が確認されたら、それを手掛りとして、前述した「本来の伝記に関する諸問題」を解明することができよう。例えば、その実例について、筆者がその伝記を書く「原動力」となったものを探し出し、それを分析すれば、そこから(1)「主人公に対する伝記者独得の関心」が、如何なる(内容、性格の)関心であるか、(2) またその様な「関心」から、伝記が如何にして生れたかを一、要するに「本来の伝記」の素性を解明することができよう。

以上、伝記の“Nature”の研究方法与対比して、私の伝記研究の方法を述べたが、上述の様な両者の相違は、私の伝記研究（「本来の伝記」に関する研究）が「伝記の“Nature”の研究」とは違った研究であることをはっきり示している。結局、私の伝記研究は「伝記の“Nature”の研究」ではない。

してみると、私の伝記研究は研究対象からすると、従来の伝記研究のどの分野にも属さない特殊な研究という他は<sup>(26)</sup>ない。

6

次に、私の伝記研究は、先に区分した各種の伝記研究とは立場が異なる。

先述の様に、私の伝記研究は、「本来の伝記」の素性（「伝記」は本来、人間精神から如何にして生れたか—）、「伝記」の人間に対する本来の意義（「伝記」の本来の存在理由）を明らかにしようとするのであるから、その立場は、これを哲学的人間学的立場といってよいであろう。

これに対して、前述した各種の伝記研究は、文学的立場、歴史学的立場の研究や歴史的概観（立場は歴史的立場）である。先述した「伝記の“Nature”の研究」も、例えば、ガーラティーの場合（John A. Garraty, The Nature of Biography, 1957）、その内容は、伝記の歴史的概観と、心理学からの援助の必要を強調した伝記作成法である。

結局、私の伝記研究は研究対象においても立場においても、従来の伝記研究とは異なった特殊な研究という他は<sup>(27)</sup>ない。

7

終りに、今日までの私の伝記研究の行路をふり返ってみよう。

先述の様に、私の伝記研究は、もともと、哲学的人間学的見地から伝記に対する関心があったところへ、「伝記とは何か—」に関して諸説が世に行われているという事実<sup>(28)</sup>にも触発されて、「本来の伝記」を問題とし、「本来の伝記」に関する「三つの基本的問い」に答えることを目的とするに至った。

さて、「本来の伝記」に関する諸問題を考究し、その結果をふまえて「基本的問い」に答えるには、先ずその手掛りとなる「本来の伝記」（または、それにちかい伝記）の実例を、世に行われている伝記の中から見つけ出さねばならぬ。私の伝記研究の最初の課題はそれであった。

それで、私は「本来の伝記」の実例を見つけ出す為の手掛りを、「主人公に対する伝記者独得の関心」にもとめた。伝記を生み出すのは筆者のころである。それで、もし、ある伝記の筆者がその伝記を生み出すころのうちに、「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心が核心として含まれていることが確認されたら、その「ころ」は「伝記者独得のころ」であり、その伝記は「本来の伝記」であろうからである。そして、こうして「本来の伝記」の実例が確認されたら、次にその実例について、上に一応は「伝記者独得の関心」といえることが確認されたその筆者の関心の内容、性格を、改めて分析することによって、その結果をふまえて、「本来の伝記」に関する「三つの基本的問い」にも、順次に答えることができると思われたからである。

結局、私の伝記研究の最初の課題は、先ず「本来の伝記」の実例を見つけ出すことで、この課題を果す為の研究（第一段階の研究）の第一着手は、世に行われている各種の伝記について、筆者がそれを書く原動力となったものに着目し、それを分析して、そのうちに、「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心が含まれているか否かを検討することであった。

こうして始めた第一段階の伝記研究の諸結果は、その都度発表してきた。<sup>(29)</sup>また、第一段階の研究の終りには、「自己目的・自足的伝記」の実例について、その筆者の主人公に対する独得の関心の内容、性格の分析にも足を踏み入れた。(その結果も、その都度発表してきた。)<sup>(30)</sup>そして、今日に至っている。

顧みると、その途は、必ずしも平坦ではなかったし、迷いのない途でもなかった。無駄な骨折りもあったし、迷路に迷いこんだこともあった様に思う。然し、大筋では、始めにたてた見通しに狂いはなかったし、始めに予想した順序を踏んで来た様に思う。それにしても、遅々とした歩みであった。そしていま、「日暮れて道遠し」の感が深い。

とまれ、今日までの私の伝記研究は、上述の様に、その第一段階が終ったところである。内容からいうと、「本来の伝記」の実例を見出し、その諸要素を分析したところであるが、これは前述から明らかな様に「本来の伝記」に関する「三つの基本的問い」に答える為の準備作業にすぎない。畢竟、全体の構

想からいうと、私の今日までの伝記研究は、形式的にも内容的にも、まだ準備作業が一応終わった段階に止まっている。

それで、今回のこの小論の希いは、いままでいろいろの機会に発表してきた私の伝記研究の結果を取りまとめ、且つ、それらの内容を再考し整理し直してその摘要をつくり、それを踏まえて、新たに「本来の伝記」に関する「三つの基本的問い」に順次に答えることである。畢竟、私の従来の伝記研究に一応の決まりをつけ、それに「点睛」することである。

——未完——

註

一

- (1) 拙稿、「カント宗教論の性格」(東京教育大学哲学会『哲学論叢』第16輯)は、その研究結果の一つである。
- (2) 拙稿、「カントの『根源悪』について」(大阪府立大学紀要<人文・社会科学>第12巻<1964年>)参照。
- (3) 同上参照。
- (4) ロマン・ロラン(片山敏彦訳)、『ペートル・ヴェンの生涯』(岩波文庫)18頁。
- (5) 同上、12頁。
- (6) ペギー、『われわれの青春』(新村猛、『ロマン・ロラン』<岩波>所収、56頁)
- (7) 前出、『ペートル・ヴェンの生涯』13—14頁。
- (8) 拙稿、「伝記者のこころ」(故金沢尚淑博士追悼論文集、『総合科学の諸問題』<1987>所収)、306—307頁、343—344頁参照。この論文は、ここにあげた問題を解明する為の論文である。
- (9) 拙稿、「伝記について」(一)(二)(三)(四)、『京都文化短期大学紀要』第3、4、6、8号)参照。
- (10) というのは、従来の伝記研究で、哲学的立場、哲学的観点からなされた例はない(後述)、反対に、従来、哲学が伝記を問題とした例もきかない。ところが、私の伝記研究は、上述した双方の性格を併せもつからである。即ち、私の場合、伝記を研究する様になっても、「人間研究」という哲学的観点(先述)が忘れられる筈がないから、私の伝記研究は、これを伝記の研究(伝記論)としてみれば、哲学的立場での伝記論であり(第一章六節参照)、これを哲学研究の一分野としてみれば、人間が創った文化の一つ(伝記)を対象とした研究、即ち文化哲学の一隅といえようからである。

- (11) 例えば、『ブリタニカ』の「伝記」の項には、「伝記は、……文学的表現の最も古い形式の一つで、伝記文学は、ある一人の人の生涯を言語で再創造することを狙っている。」とある。

また、例えば、『ブロックハウス』は、「伝記は歴史記述の一分枝 (ein Zweig der Geschichtsschreibung) である。」といい、カッセルの『文学百科辞典』でも、「伝記は歴史の一分枝 (a branch of history) で、その目的は、出来るだけ忠実に個人の生涯を述べることである」という。

なお、日本歴史学会編集『伝記の魅力』(吉川弘文館) (1986) 参照。

- (12) 世に行われている伝記の成立事情をみると、或いは、筆者がそれを特定の目的に利用する為に、或いは、それによって文学的狙い、歴史(学)的狙いを達成する為に(作品、資料として)書かれた場合が多い。この様な場合には、筆者のところに伝記(者)以外の要素が入り込んで、然も、それが主役を演ずるだろうから、その為に伝記は変貌していると思わざるをえない。

ここで「本来の伝記」というのは、一応は、その様な伝記(者)以外の諸要素が筆者のここに入り込んでいない、従って変貌していないもとの伝記という意である。(後述第五節参照)

- (13) 世に行われている伝記は多種多様である。ところが、前述の様に、「伝記は文学の一ジャンルである」とか「歴史の一分枝である」とかいわれることがある。

この場合、論者は自分が取りあげた種類の伝記以外に、他種の伝記が存在することを知り、それを認めながら敢えてそう断定するのであるから、彼等はそれによって実は、他の種の伝記に対して、その種の伝記こそが本来の伝記の姿だと主張しているのに違いない。

- (14) 前註(11)(13)参照。

- (15) 私の知る限りでは、従来、「本来の伝記」をこの様に問題にして追究した例はない。

最近『伝記の魅力』(前出)が出版された。これは歴史家と伝記作家の伝記に関する随想を集めたものだが、ここで、筆者達がいう「伝記」は、「歴史の一分枝」、または「文学の一ジャンル」としての伝記である。筆者達は、「伝記」とはそういうものだと頭から決めてかかっている、「伝記」をそういうものと断定すること自体については、何等問題を感じていない様である。

- (16) 前出拙稿、「伝記者のころ」第二章参照。拙稿、「伝記作者クセノボンの経験」参照。

- (17) 同上、「結語」第二節参照。

- (18) 主なものをあげると、一

Harold Nicolson, The Development of English Biography, The Hogarth Press, London, 1928.

John C. Metcalfe, The Stream of English Biography, 1930.



- D. R. Stuart, *Epochs of Greek and Roman Biography*, Berkley, 1928.
- A. Momigliano, *The Development of Greek Biography*, Cambridge Mass, 1971.
- O. Neill, *A History of American Biography*, Philadelphia, 1935.
- William H. Davenport and Ben Siegel, *Biography Past and Present*, 1965.
- 秀村欣二、久保正彰、荒井献編、『古典古代における伝承と伝記』、昭和50年、岩波書店。
- (19) 例えば、  
“Studies in Biography”, Harvard University Press; “biography”, The University Press of Hawaii for the Biographical Research Center.
- (20) 例えば、  
Andrés Maurois, *Aspects de la Biographie*, 1928.  
James L. Clifford, *Biography as an Art*, 1962.  
ク , *Problems of a Literary Biographer*. (1970)  
Paul M. Kendall, *The Art of Biography*, 1965.
- (21) 例えば、  
John A. Garraty, *The Nature of Biography*, 1957.
- (22) “nature”は、「天性、通有性」(『岩波英和辞典』)を意味する。然し、この語は多義で、時には本性(本来の性質)を意味する場合もある。
- (23) 『国語辞典』(岩波)、「本来」の項参照。
- (24) 同上、「固有」の項参照。
- (25) 『広辞苑』(岩波)は、「固有性」を「あるものに本来具わる性質」という。  
また、『独和辞典』(木村・相良独和辞典)、『仏和辞典』(三省堂、『コンサイス仏和辞典』)でも、“*eigentlich*”や“*originale*”を、「本来」「固有」の両義に訳する。
- (26) 前註(10)及び後註(27)参照。なお、第二章参照。
- (27) 私はよく、人から「伝記の研究は一体どのような意義(メリット)をもつのか?」と問われることがある。ここに述べた様に、私の伝記研究は、一般の伝記研究と異なった特殊な研究なので、この問いに対しては、私はただ私の希望的観測を述べる他はない。次にそれ(希望的観測)を記してみよう。
1. 私の伝記研究は、先述したその生い立ちからみても、またその立場、内容からみても、一面では、文化の一隅(伝記)についての哲学(文化哲学の一隅)として、他面では、哲学的立場による伝記研究として、従来疎遠であった伝記研究と哲学研究とをつなげる一つの掛橋の役目を果たすのではないか。(前註、〈10〉参照)
  2. 私の伝記研究は、伝記論の一つとしては、先述の様に、従来の研究が手を着けていない研究対象(「本来の伝記」に関する研究)の研究である。それ故、私

の伝記研究は、成果はともかく、伝記論に従来なかった新しい分野を拓いたことにならないか。 (私の伝記研究の成果自体のメリットの有無は、識者の批判に俟つ他はない。) なお、第二章参照。

3. 私の様な伝記研究(「本来の伝記」に関する研究)は、今日の伝記の筆者にとっても無意義とは思われぬ。

先述の様に、伝記は人間の歴史の中で永く生きつづけて来たし、人間社会において重い存在理由をもっていた。ということは、伝記が本来は、人間の生活(生き方)と独得の深いかかわりをもっていた、ということである。もし、そうでなかったら(また、各時代の変貌した伝記も、その様な「本来の伝記」の面影を宿しているの でなかったら)、どうして、伝記がその様に歴史の中で永く生きつづけることができようか。

ところが、今日、伝記は殆どその刺(人の生き方とのかかわり)を喪ったかにも見える。そうなった最大の原因は、恐らく、今日の伝記の筆者が、銘々自分の思惑で各種各様のいわゆる伝記を書きなぐるからである。(前出、『伝記の魅力』参照)

伝記がこの様にして書きなぐられる限り、伝記は今後もいよいよ本来の姿から遠ざかるに違いない。この様な状況は、伝記が本来、人の生き方に対してもっていた意義の重さを思うと、見過ごしてよいことではない。(後述参照)

この様にいっても、今日の伝記の筆者が、伝記者本来のころをすっかり忘れてたとは思われぬし、また、世に行われている伝記が、伝記本来の意義を喪い果てたとも思われぬ。

この様な風潮の下で、敢えて伝記本来の生れ、本来の姿、本来の意義、伝記者独得のころを問題とし、それを省み、解明することは無意義なことではあるまい。それは例えば、伝記の筆者がある種の伝記観を読者に押しつけたり、反対に、読者の興味におもねる様な風潮に対して、いわゆる「地の塩」の役目を果たすかも知れない。

(28) 前註(13)参照。

(29) 拙稿、「伝記作者クセノボンの経験」(1)―(4) (『八代学院大学紀要』、18―21号) 前出拙稿、「伝記について」(一)(二)(三) (『京都文化短期大学紀要』、第3、4、6号) 等。

(30) 同上、「伝記について」(四) (同上、第8号) 及び、前出拙稿、「伝記者のころ」